

父親たちの星条旗

2006(平成18)年10月28日鑑賞(梅田ピカデリー)



第1章

見ごたえも面白さも満点！

監督・製作・音楽＝クリント・イーストウッド／製作＝スティーヴン・スピルバーグ／原作＝ジェームズ・ブラッドリー、ロン・パワーズ『FLAGS OF OUR FATHERS』(文春文庫刊)／出演＝ライアン・フィリップ／ジェシー・ブラッドフォード／アダム・ビーチ／バリー・ペッパー／ジェイミー・ベル／ポール・ウォーカー／ジョン・ベンジャミン・ヒッキー(ワーナー・ブラザーズ映画配給／2006年アメリカ映画／132分)

……なぜ今、硫黄島？ クリント・イーストウッド監督はなぜ2部作構成で……？ その回答はものすごいマスコミの前宣伝を読めば明らかだが、戦争映画が大ヒットしない今の日本では、観客の反応が少し心配……。第1部は、アメリカ人なら誰でも知っている物語だが、日本人はなじみがないだけに余計心配。しかし反面それは、栗林中将が登場する第2部への期待感にも……。 「イラク戦争を始めた米国に対する間接的な批判」などと物知り顔の評論をする前に、まずは61年前に現実に存在した硫黄島の戦いの実態とその意味を、客観的、歴史的に学ぶことが大切。そう考えると、公開初日の観客の少なさが何よりも気になるのだが……。

ものすごい前宣伝だが……

遂にクリント・イーストウッド監督の「硫黄島」2部作の第1作『父親たちの星条旗』が公開！ 大いなる期待感を持って公開初日の10月28日の夜7時20分からの指定席を、10月26日の木曜日に購入していたところ、10月26日の毎日新聞は「戦後60年の原点 番外編」を企画した他、10月27日の朝日・読売の夕刊には大広告が掲載された。こりゃ劇場は満席になるだろうと思っていたが、意外や意外、観客席はまばらというよりガラガラ……。アベックの姿は少なく、1人で来ている男女の年配者や若者がチラホラと。私と妻と産経新聞の記者の3人は、最後列の真ん中の席を1席ずつ空けて予約していたが、その前の列には誰1人座らず、

さらにその前の列に4人の家族連れがそろって入ってきたのが目立つ程度。こりゃ一体ナニ……？

私が行ったのは松竹系のピカデリー劇場だが、この映画は東宝系のナビオTOHOプレックスやTOHOシネマズなんば等でも上映しているので、若い人たちはそちらに行ったの……と少し甘く考えてもこれはひどい……。11月3日公開の『DEATH NOTE』後編には若いアベックがわんさかと押し寄せ、満席になること確実と思われるだけに、これはいくら何でも……。

若いヤツらがもともと硫黄島の戦いなどに興味がないのはわかるが、新聞を見たり、硫黄島の戦いを取りあげたNHKスペシャルを観たりして、問題意識を持たなければダメなのだが……。これだけ若者が劇場に来ていないのを見れば、こいつらは新聞も読んでないし、テレビもアホバカ・バラエティーしか観ておらず、小難しいNHKスペシャルなどにはチャンネルを合わせたことがないのでは、と絶望……？

第1部よりは第2部の方が……？

第1部のテーマは、硫黄島の摺鉢山の頂上に星条旗を掲げる6人の兵士たちの姿を撮影した1枚の写真が太平洋戦争の運命を変えたという、アメリカ人なら誰でもよく知っている物語を前提として、そのタイトルどおり、その兵士の1人ジョン・“ドク”・ブラッドリー（ライアン・フィリップ）の息子の視点からその写真と硫黄島の戦いそしてあの戦争を見つめたもの。

しかしこれは逆に言えば、アメリカではいくら有名でも日本人はそんな話はトンと知らないのが当然……。

逆に、ノンフィクションライター梯久美子氏が日本軍の指揮官栗林中将に焦点をあてて硫黄島の戦いを描いた『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』（新潮社刊）が、今年の大宅壮一ノンフィクション賞を受賞したこととタイミングを合わせたかのように、来る12月9日に公開されるのが第2部『硫黄島からの手紙』。グアムやサイパンでの玉砕に続いて、硫黄島で日本軍守備兵が全員玉砕したことは日本人は比較的によく知っているうえ、硫黄島陥落まで36日間も日本軍が持ちこたえたのは、それを指揮した栗林中将の徹底抗戦の戦略・戦術にあった

ことは、少しは語り継がれている物語。

また、第1部には有名な俳優がほとんど出ていないから、クリント・イーストウッド監督で売れるしかないというハンディキャップがあった(?)が、第2部は栗林中将を演じる渡辺謙をはじめ、中村獅童、二宮和也、加瀬亮など有名な日本人俳優がたくさん登場する。

したがって、第1部のヒットの有無にかかわらず、日本では第2部の方が興行的には期待できそう。ちなみに、12月9日公開にもホントは大きな意味があるのだが、さてそれは……？

『父親たちの星条旗』 VS 『プライベート・ライアン』

私が驚いたのは、この『父親たちの星条旗』のプロデューサーにスティーヴン・スピルバーグの名前があったこと。1998年9月に日本で公開された『プライベート・ライアン』はライアン2等兵の生き方に焦点をあてながら、第2次世界大戦のノルマンディー上陸作戦を描いたものだが、これがスティーヴン・スピルバーグの作品。冒頭に戦闘シーンのものすごさを観客に見せつけながらも、それをメインとせず、4人兄弟のうち3人が死亡したため「母親の元へ帰らせる」という大統領命令が出される中、ライアン2等兵がどのような生き方を選ぶのかを焦点としたすばらしい映画だった(『シネマルーム1』117頁参照)。

その8年後に公開されたこの『父親たちの星条旗』におけるテーマは、時代や場所こそ違え本質的には似たようなもの。

両者の比較ポイントは2つある。その第1は「戦争映画」である以上、絶対的に必要な戦闘シーンの描き方の対比。『プライベート・ライアン』は、上陸直前の水際でのすさまじい戦闘シーンが今でも語り草となっているが、『父親たちの星条旗』では、上陸し終わった直後、日本軍守備兵からの猛攻にさらされながらそれに反撃し、摺鉢山の頂上に星条旗を掲げるまでの海兵隊員たちの戦いが見モノ。「激しければ激しいほどよい」とか「戦闘シーンはリアルであればあるほどよい」というわけではないが、そうかといってチャチなものではダメ。さて、その対比は……？

第2は、本来の対比点。すなわち、1枚の写真に収められた6人の兵士のうち、

生き残ったドク、レイニー・ギャグノン（ジェシー・ブラッドフォード）、アイラ・ヘイズ（アダム・ビーチ）の3人が国民的英雄とされ、太平洋戦争を勝ち抜くための戦意高揚と戦費調達のための戦時国債ツアーでアメリカ中を駆けめぐりながら、英雄と呼ばれることにとまどい苦悩する若者たちの姿と、ライアン2等兵の苦悩との対比だが、さてそれは……？

どこまでもクリント・イーストウッズ的……

俳優時代は別として、『許されざる者』（92年）や『マディソン郡の橋』（95年）によって大監督となったクリント・イーストウッズだが、近時の『ミスティック・リバー』（03年）や『ミリオンダラー・ベイビー』（04年）を観れば、「これがオレ流の描き方」というスタイルがはっきり見えるはず。それは、監督の考え方や主義・主張を観客に押しつけるのではなく、自然な展開をさせる中であくまで観客に答えを出してもらおうという姿勢……。

そのため彼がつくる映画には、必ず議論すべきテーマや問題点が設定されている。というより、そのテーマや問題点について考えるネタや視点を観客に提供するために映画という手段を使っているのだらうと私は思っている。

その意味でいえば、第1部『父親たちの星条旗』のテーマは、前述のようにきわめて明快、すなわち、あの激戦の中、1枚の写真に写ったことによって英雄とされた3人の生き残り兵士たちの真の姿をドキュメント色を交えながら描くことによって、あの硫黄島の戦いの意味と太平洋戦争そのものの意味を考えようというものだ。したがって、良くも悪くも、この映画はどこまでもクリント・イーストウッズ的……。

したり顔の評論やコメントは……？

前述の新聞特集に登場するのは各方面で活躍している著名な方々だが、この人ならこんなコメントを書くだろうと予測できる人がいる。そして、それを読むと、また同じパターンかと少しうんざりするもの。今回のそれは、毎日新聞における鳥越俊太郎氏のコメント。「9・11以後の米国への批判にも」という見出しからすぐにわかるとおり、この映画を「イラク戦争を始めた米国に対する間接的な批

判だと考えている」また『『テロとの戦い』を大義名分に『白か黒か』『味方が敵か』の二分法で愛国心をあおったブッシュ大統領。そういうものに対して『違うんじゃないの』』という意見を映画という形で提起した。僕はそう考えている」とのこと。

ジャーナリストとしてこういう視点を持つことが大切なことは十分理解しているつもりだが、私はこの映画の意図がそこにあると考えることには大反対。また、私に言わせれば、せっかく映画を観るのにかねてからの自分の価値観に合わせて観たのでは面白くないだろうし、観る前から決まっているようなコメントを出しても仕方がないと思うのだが……。

使い捨てはどこも同じ……？

日本人の私はこの映画が描くあの1枚の写真にまつわる物語は全く知らなかったから、そのストーリー自体は興味深いものだった。そして硫黄島の戦いの英雄として祭り上げられ、いわば「客寄せパンダ」として戦時国債調達ツアーに回ったドク、レイニー、アイラの苦悩やツアーに取り組むスタンスにも三人三様の違いがあることがよくわかって興味深かった。

この映画の主演となってストーリー構成の柱となるのはドク。物語は、今は葬儀社の社長として死を迎えようとしている老人が、硫黄島について、そしてあの写真について何も語らないため、その息子が硫黄島の真実を辿りはじめるところから始まる。

なぜドクを主人公にしたのかは単純な話。すなわち、まずインディアンのピマ族の出身であるアイラは、英雄扱いされることに対する拒絶反応が最も強く、問題ばかり起こしていたうえ、次第にアルコール依存症がひどくなり、戦後すぐに若くして野垂れ死に近い死に方をしてしまった。次にレイニーも、戦争が終わり、英雄扱いが終わってしまうとまともな職に就くこともできず、社会から消え去ってしまった。したがって、残ったのがドクだけだということ。硫黄島の戦いの後、戦意高揚と戦費調達のためあれほど便利に使い回された3人の兵士のその後の運命は悲惨だったということだが、国なんてものがいつまでも親切に英雄の面倒をみってくれるわけでないのは当然……。

今日本では、安倍政権がスタートダッシュに成功したと評価されているが、その一方で、郵政民営化に反対した議員たちの自民党復党問題が焦点となり、復党容認論が強くなりつつある。しかしそうなると、昨年の9・11総選挙で「刺客」と呼ばれながら、抵抗勢力に対抗して立候補し当選した83名の議員たちの立場はどうなるの……？

もちろん、真に実力を持った議員はどんな逆風が吹いても生き残るだろうが、ひ弱な刺客たちは、かつての大物自民党議員が復党してくれば使い捨て……？
私は、それでは「仁義なき戦い」になると思うのだが……？

多すぎる画面転換に疑問が……？

今や世界的大監督となったクリント・イーストウッド作品にケチをつける評論家はまずいないはずだが、私はあえて少し疑問を提示しておきたい。映画は、導入部における若干の説明を経て、硫黄島攻略に臨む海兵隊員たちの姿を映し出していく。そしていよいよ3日間の艦砲射撃の後、1945年2月19日、扇浜へのアメリカ軍の上陸作戦が決行された。さあ、ここでどんな戦闘シーンが展開されるのだろうかと手に汗を握りながら注目していると、やはりそれはすごいもの。これでは一体いつになれば摺鉢山の頂上に星条旗が掲揚されるのか、と思わずアメリカ側の視点になってスクリーンを覗いている自分に気づくことに……。すると、そんな中……。

『プライベート・ライアン』は、映画冒頭の約20分間を徹底してノルマンディー上陸作戦の戦闘シーンに集中して観客の度肝を抜いた後、じっくりと本来のテーマに移っていった。

これに対し『父親たちの星条旗』は、戦闘シーンと星条旗を掲げた6人の兵士の家族たちの姿、そして国債ツアーに走り回る3人の兵士の姿が再三再四画面転換しながら描かれていく。したがって、戦闘シーンも途中で途切れたりまたつながったりすることになる。したがって、スタジアムの観客の歓声に応えながらスポットライトを浴びている3人が突然また硫黄島の戦場に戻ったり、その画面転換には結構激しいものがある。

これはすべてクリント・イーストウッド監督が采配を振るってやっていること

だが、そこまで頻繁に画面転換をしなくてもいいのでは、というのが私の疑問。さて、あなたは……？

第2部の予習もしっかりと……

第1部『父親たちの星条旗』のパフレットには、①不肖・宮嶋カメラマンインタビュー、②考察「硫黄島の戦い」、③硫黄島レポート2006という3つの解説があり、これは硫黄島の戦いを勉強するうえで大いに役立つもの。鳥越氏のように映画の意図・狙いをパッと1つに決めつけてしまうのも、あれだけ有名なジャーナリストならいいかもしれないが、一般国民はそうではなく、まず勉強することが大切。勉強する視点はいろいろあるが、最低限必要な視点は①地図上における硫黄島の位置は？ それを制圧することの戦略的意味は？ ②硫黄島の「防衛」のために、栗林中将以下の日本軍守備兵は何をした（できた）のか？ ③5日間で落ちると言われていた硫黄島の攻略に、なぜ36日間も要することになったのか？ なぜアメリカ側に多大な犠牲が出たのか？ ということ。

そして最終的には④そのことはあの戦争の中でどんな意味を持っていたのか？ そして⑤そのことを日本人としてどのように受け止め、語り継いでいかなければならないか？ という視点。

日本人にはなじみの薄い第1部の物語と違って、第2部は絶望的状况の下で、死を覚悟して戦った兵士たちの姿に感情移入しながら観ることができるはず。その感動のためにも、上記のような視点からの事前学習をしっかりと……。

2006(平成18)年10月30日記